

10 中務在官一条雜記、弘化二年十一月

11 丹波氏系譜二種

文献

一 山崎佐、「錦小路文書」、(1)(2)(3)、日本医史学雑誌、6(2)

昭31・6(4)昭31・9(2)昭33

一 山崎佐、「江戸幕府時代における朝廷の医療制度」、日本医史学雑誌、7(4)昭32

一 山田重正『典医の歴史』、昭55

一 岡田靖雄・榎田五郎「ある社会精神医学者の肖像」、臨床精神医学13(6)、一九八四

一 『公卿辞典』、坂本武雄、昭56

(京都府医師会)

『医心方』卷二・四の異本群

について

小曾戸 洋

現伝の『医心方』のテキストには、半井本・仁和寺本・延慶本などの系統が知られるが、このほか卷二・四に関しては別系の異本が存在する。すなわち、(1)江戸初期写本(北里東医研医史研所蔵)、(2)寛政写本(内閣文庫所蔵本のうち)、(3)宝暦写本(石原明氏旧蔵)である。『医心方』は書誌学的にも今後さらに究明の必要な書であるが、ことにこの卷二・四零本についての報告は皆無である。よってここにその初歩的検討を行ったので報告する。

〈1〉江戸初期写本(以下、江戸初本と略称)

本写本は最近、古書の入札会に出現し、私どもの研究室の蔵に帰した新資料である。いうまでもなく仁和寺本の発見は寛政、半井本・延慶本の出現は嘉永以降のことであるから、それ以前、とりわけ江戸初期の写本ということ自

体、極めて貴重な資料といえよう。

本書の現状は卷子装一軸であるが、もとは四針眼訂の袋綴であったものを、のちに卷子本に改装したものである。

いかなる理由によりこのような改装がなされたかは不明であるが、ともかく改装時、丁順が全く錯乱し、無秩序の状態で継ぎ合わされている。そこでいま原本の複写を断裁し、他本を参考に冊子装の旧に復元したところ、卷二の約四分の一、卷四も約四分の一を存し、前者の現存部は前半に、後者の現存部は後半に集中することが判明した。この書は改装の時点でかなり損傷しており、さらに卷子装に裏打ちされてからも相当の虫損を受けている。書写年代は識語がないので未詳であるが、江戸初期とみてよいであろう。朱の返り点・送り仮名が付され、これは後述の宝曆本とほぼ一致する。

〈2〉寛政写本（以下、寛政本と略称）

寛政三年（一七九一）、幕命によって江戸に郵致された仁和寺本は、多紀元徳が元簡・元倭らをして鈔写せしめたが、この際、欠失部のうち卷二・四は多紀家所伝の別本によって補鈔された（元徳跋では卷十一・二十二も多紀家本によ

ったというが、札記はこの両巻を仁和寺本と称する。いまこれは問題としない）。この卷二・四の部分は、半井本校刻の際、校勘資料として用いられた。すなわち札記卷二・四中に引かれる「旧鈔零本」がこれに合致する。

〈3〉宝曆写本（以下、宝曆本と略称）

宝曆八年（一七五八）、御厨子所預若狭守紀宗直写。袋綴、卷二・四合一冊。宗直は武内宿禰の後裔で、享保五年正六位下、ついで御厨子所預に補せらる。延享元年正五位下、三年若狭守に遷る。安永四年従四位上に叙され、天明五年卒八十五（『事實文編』）。末尾に宝曆八年十二月十四日付の識語一葉がある。

〈考察および結論〉

上記三書は、同一の卷二・四零写本から派生した同系本である。いまその共通の底本を祖本と称す。この祖本はすでに佚しているので書写年代は明らかではないが、室町以前の旧鈔にかかるとはまづ間違いない。少くとも江戸初期、祖本にはかなりの損傷があった（とくに卷二）。その損傷状態からして、祖本は粘葉もしくは袋綴の冊子装であったことがわかる。三書はいずれもこの損傷部

の文字を欠脱している。ちなみに巻二首の序末の「庸誤乱聖旨」の五文字は、半井本では本文にはなく、後人の細注（特有の右下り字体）で「已上五字雜在宇治本医家本等伝之」とあることから、この祖本は宇治本・医家本の系統であることが知れる。

江戸初本が祖本をありのまま影写したものであることは、忠実に写しとられた小口の破損状態から窺える。祖本は、巻二・三九葉、巻四・一九葉であった。寛政写本と祖本との間には、江戸初以降、宝暦以前の書写にかかる転写本が介在していた。これが札記にいうところの「旧鈔零本」と目される。祖本の小口側に生じた欠損は年を経るごとに損傷の度を増し、文字が脱落していった。このことは、江戸初本↓旧鈔零本（これは現存しないが、寛政本とほぼ同一と見做せる）↓宝暦本の順に欠損の度合が進行していることから推せる。寛政本は毎半葉の行詰に関し、祖本の旧を伝えていない。仁和寺本の書式に合わせて鈔写されたからである。宝暦本は巻二において少しづつ行詰が多くなってしまうため、三九葉の祖本を三八葉で書写しおわっている。したがって小口にあるはずの欠損部は必ずしも小口

にあるとは限らない。

以上のように、巻二・四の零本系に属する三種の伝本のうち、最も祖本の旧を伝えているのは今回出現した江戸初本であり、次いで寛政本↓宝暦本の順である。ただし江戸初本は今日約四分の一が残存するに過ぎない零本中の零本である。したがって、この系統を校勘資料として利用するにあたっては、江戸初本を第一とし、残りは寛政本を優先的に採るのが最善と考えられる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室）